



No. 141

ティーブレイク

Tea Break

アバター

映画「アバター」では、征服民が被征服民の側に回り、被征服民の心情を理解してそれを征服する、という戦略をとる。征服民である地球人は、被征服民であるパンドラ星人の化身（アバター）となって、その中に入る。そして主人公は、パンドラ星人と地球人の間を行き来することになる。

自分は弁理士。そんな自分が、日本弁理士会の役員として活動するときには、「弁理士を増やすのは良くないことだ、決して世の中のためにはならない」という論調の中に身を置くことになる。

その一方で、同じ自分が受験生の前に立ったときには、弁理士を増やすのは良いことだ、大歓迎だ、ということになる。

むろん、試験の難易度を下げることが良いことだとは言わない。しかし、難しすぎて、努力しても努力しても受からない、というのは、明らかに間違っている。ふと、「普通の試験というのは、勉強すれば受かる。逆に、勉強しなければ落ちる。だから勉強しなければならない。けれども、弁理士試験というのは、勉強しても落ちる試験なのだ。であるから、弁理士試験に受かろうと思ったのであれば、それこそ必死になって勉強しなければならない」と教えていた頃を思い出す。そしてやはり、難しすぎるのもどうかと思うことになる。

けれどもやはり、弁理士会館の役員室に来れば、弁理士のレベルの担保のために試験というのは難しくあるべきだ、ということをも主張することになる。この変わりようは、何なのだろう。どちらも、それぞれの場所では、心の底から本気でそう思っている。

そうした自分の「変換装置」は時間である。一定時間を置くことにより変身できる。すぐには切り替えはできない。一定時間後に場所を移動し、その場所に着いたときには、すっかり別の自分になってしまっている。

ただ、こんな感じで複数の顔、それも「それぞれの場所でそれになりきった複数の顔」というのは、多くの人が持っているのではないだろうか。むろん小学校の頃などは、「人間、ウラ・オモテがあってはいけない」と教えられるのであるが、現実の世の中というのは複数の顔をうまく使い分けていかなければ暮らして行けないほど、複雑多様化しているように思う。

ところで、裁判官などはどうしているのだろうか。知り合いの元判事の弁護士さんなどは、特に刑事裁判をやっていたことから、現役の当時はたった1キロのスピード違反すらしなかったという。いわく「人を罰する立場に居るのに、自分が違反をするわけにはいかない」ということであった。

ある意味、本当に大変な職業である。

ちなみに、映画では、主人公は最終的にはアバターのほうを自らの本体としてしまう。逆に裁判官は、裁判官を辞めれば、元の一般人に戻るのであろう。

しかしながら、弁理士というのは、登録を維持したまま弁理士として死にたいと思っている人も多いことが、最近分かった。果たして自分はどうなのか。けれども、戻るにしても、どこに戻るのだろうか。それは、「どこに戻るべきなのか」ということと同じくらいに難しい。おそらく、これを読んでいる多くの人もそうなのではないだろうか。 (正)